

『すゑはんじやう記』『夜うちそか大名ぞろへ』

— 影印と翻刻 —

木村 八重子

標題の二書は、「昭和二二、三、一三購入」の朱印印を持つ国立国会図書館所蔵本であり、『国立国会図書館支部上野図書館和漢書書名目録 古書之部』（国立国会図書館管理部 一九五二年刊 国立国会図書館「以下、当館」請求記号029.1-Ko548u）に著録され、早くから公開されている。『国書総目録』（補訂版 岩波書店 一九八九—九一年刊 当館請求記号UP3-E1）にも「すゑはんじやう記 すゑはんじやうき」一冊 魚むさうの名哥 類事典 版国会「夜うちそか大名ぞろへ ようちそかだい」一冊 別そがの十郎大みやうづめ 外 版国会*とあり、マイクロフィルムも備えられ、新出資料ではない。

にもかかわらず、ここに紹介する理由は、平成二一年三月に原本を拝見し、後述するように、大変珍しく貴重な資料と思われたためである。二書はともに一三×九センチほど、B7判に近い小本である。

*『国書総目録』の凡例は以下のとおり。魚…角書 類…分類 別…別称 外…外題 版…版本の存在する図書館・文庫等

- 翻刻は二書ともに、次の方針によった。
1. 用字、仮名遣い、濁点は表記のままとした。
 2. 変体仮名は平仮名に改めた。
 3. ハ、ミ等は片仮名のままとした。
 4. 原本通りの改行を原則としたが、一部、スラッシュ（/）で改行を表した。
 5. 意味をあきらかにするため、仮名の語に丸括弧で漢字等を補った。
 6. 各丁表・裏は、オ・ウと略記した。
- なお、二書の注、特に「婦人良方」（一四頁参照）に関して、古典籍課職員の方々の御助力をいただいた。

一、『すゑはんじやう記』一冊

(作者・刊年・版元不明)

書誌事項に記すように丹表紙で、原装のようにみえる。原装でないにしても相当古い時期の改装で、大きさは草双

(表紙)

(注) 見返しは白紙のため影印を省略した。



紙の初期の姿である(赤小本)に近い。『国書総目録』の分類に「事典」とあるのは、内容が「喉に骨が刺さった時、抜けるまじない」など、当否は別としても、日常生活の「用」に供する性格を持ち、後世の「重宝記」のような面があるためであろう。

しかし、「からちやうずの事」が大小便不通の意味であれば、八つある○の頂すべて、身体の息災にかかわること、呪禁法が民間の呪いとなった最末端の出版現象のように受け取れ、分類上は仏教、呪術、俗信などに当たると考える。

挿絵の入れ方は、絵のみを摺った丁と字のみを摺った丁を交互に挟み、結果として各見開き毎に半丁の挿絵が入るという素朴な造本となっている。(挿絵には後人の施した手彩色が少しある。すでに退色しており、かなり古い時代のものとみられる。)

卷末挿絵の美人の姿態には、明暦二年(一六五六)刊『ね物がたり』(『うたのほん』— 箏・三味線音楽を中心に 天理ギヤラリー 第137回展) 天理図書館編 天理ギヤラリー 二〇〇九年刊 当館請求記号 Y93-J1998 一一頁)を思わせるものがあるが、成立については後攷に俟ちたい。



一丁オ
 (注) 中央に太字で「松」。その上に二羽の舞鶴、右下に竹、左下に蓑亀。(破損あり)
 松竹鶴亀で吉祥を表現した扉。

このように、「物語」でも「尽くしもの」でもない、「実用もの」めいたミニチュア出版物が、あるいは〈赤小本〉の源流であったかも知れない。全く類書の存在を知らず、多くの問題を提起する貴重な一冊である。

〈書誌事項〉

請求記号 本別14-29 (マイクロファイル)

ム YD1-173)

形態 一三・〇×九・〇センチ

表紙 丹色 (元表紙とみられる)

題簽 表紙左肩に貼付 一一・〇×四・〇

センチ (子持杵) 「すゑはんじやう

記」、右肩に小字で「むさうの名哥」

下端に岩上の松

丁付 一く六、丁付なき半丁 (後ろ見返し)

柱題 なし

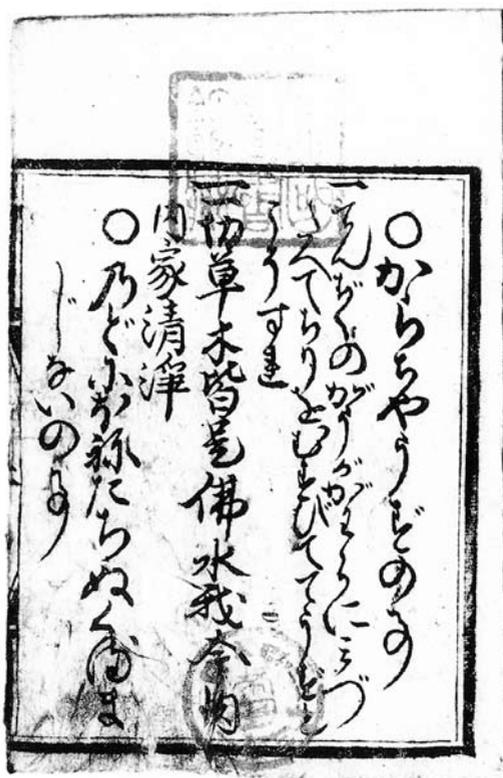
画作者名 なし

版元名 なし (題簽と第一丁の松は版元を

示すか)



(注) 唐獅子に紐を付けて牽く唐衣裳の人物。伎樂を先導する獅子と獅子使いの類か。邪凶なものを制御する意味を表すか。被り物は蓑亀を示すか。



○からちやうずの事
(空唐) (手水)

一 てんちくのがうががわらにミづ
(天然) (恒河河原) (水)

たへてちりをむすびててうずと
(絶) (塵) (結) (手水)

こそすれ

一 一切草木皆是佛水我今肉

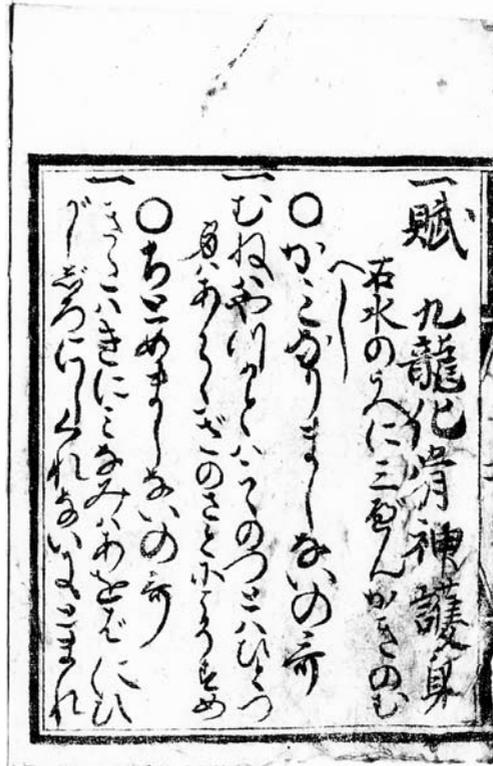
内家清浄(注)

○のどにほねたちぬくるま
(喉) (骨) (立) (抜) (腕)

じないの事

(注)

「手水」には大小便の意味があり、その不通を治すまじないか。呪歌と経文からなる。「てんちくのがうががわ」はインドのガンジス河。「一切草木」以下の出典未調査。



一賦 九龍化骨神護身

右水のうへに三べんかきのむ

へし

○かみなりましないの哥

一むねはやつかとハこ、のつとハひとつ

身ハあらゝぎのさとにこそすめ

○ちとめましないの哥

一きたハきにミなみハあをばにひ

がしじろにしけれないにとまれ

(注1)

(注2)

(注3)

この場合は呪歌がなく、七字の賦を水の上に三度書いてその水を飲む。

これは呪歌のみ。「あらゝぎ」(塔)は野蒜のこと。

呪歌。四丁オの「ちのミチ」に続く。四方に四色を配しているが、五行説の組み合わせと異なる。依拠するもの未詳。



(疫病) やぐびやうをなますに / (鍾馗) しやうき

大ぢんの

(持) もつたる

(劍) けんハ

さ

て

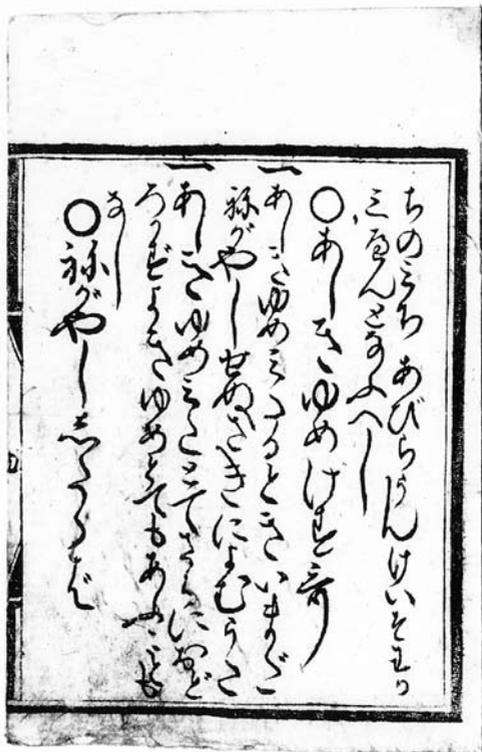
(句) もてさ / きれ

たり

(注) 歌の下に、右手に劍を持ち左手を突き出す多
 髯の鍾馗像。鍾馗は唐の玄宗皇帝の夢に、魔を
 払い病を癒したとして、端午の節句にも小鬼
 を拉ぐ姿などで描かれる。



(注) 虎に紐を付けて牽く唐衣裳の人物。一丁ウの唐獅子と同じく邪凶なものを制御する意味を表すか。衣裳の模様は百足か。



ちのミちあびらうんけいそわか
(血) (道) (阿毘羅畔次婆婆阿)

三へんとなふへし
(遍) (唱) (注1)

○あしきゆめけす哥
(悪) (夢) (消)

一あしきゆめミたるときいまだ
(悪) (夢) (見) (時) (未)

ねがやしせぬさきによむうた
(寝返) (先) (詠) (歌)

一あしきゆめミたとてさらにおど
(悪) (夢) (見) (驚)

ろかずよきゆめとてもあふことも
(良) (夢) (合)

なし
(注2)

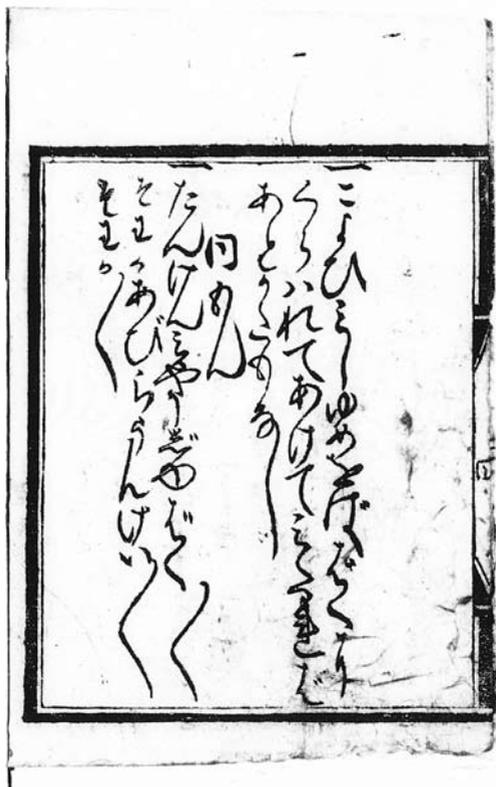
○ねがやししたらば
(寝返)

(注1)

「ちのミち」まで呪歌の続き。「あびらうんけいそわか」は正しくは「あびらうんけんそわか」で大日如来に祈る呪文、「あびらうんけん」は宇宙一切をあらわす大日如来の意、「そわか」は成就吉祥。

(注2)

悪い夢を見て寝返りしないうちの呪歌。寝返りを重視している。



(二行分空白)

一 今宵 (見) 夢 (猿) 一 ことよひしゆめをばばくに

くらハれてあけてミたらば

あとかたもなし

同もん

一 たんけんミやうじゆばく

そわかあびらうんけい

そわか

(注)

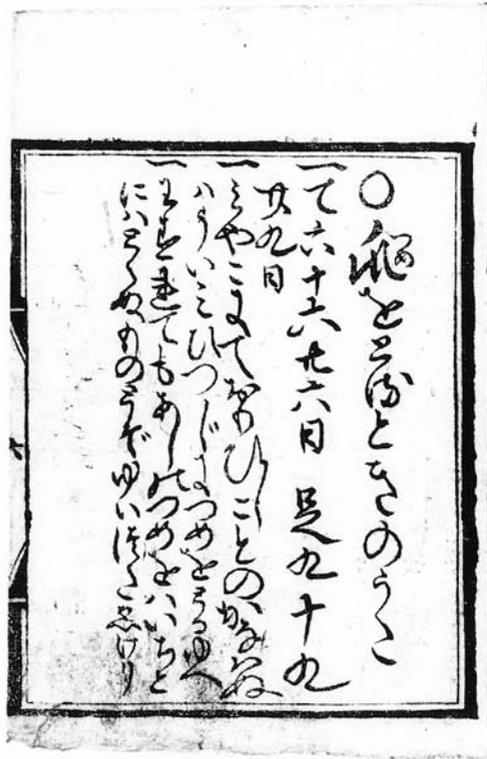
呪歌中の「猿」は悪夢を喰うとされる中国の想像上の動物で、日本でも良い初夢を見るまじないの宝船などに書かれる。「たんけんミやうじゆばく」は漢字未詳。「明呪猿」か。



(注) 右手に剣を立てて持ち、左手に薬壺を持ち盤上に結跏趺坐する着衣の鬼。不動明王と薬師如来を一緒にしたような姿。



(注) 井の傍に座して水汲む天女と、柳樹の方向に進む騎馬の天女。馬は首を転じている。天女でなく菩薩か。井側の一体の被り物に鳥が付いているか。井桁に壺があり汲むのは薬水か。



○爪をとるときはうた

一六十六廿六日 足九十九

廿九日

一ミヤコにておもひしことのかなハぬ

ハういミひつじにつめをとるゆへ

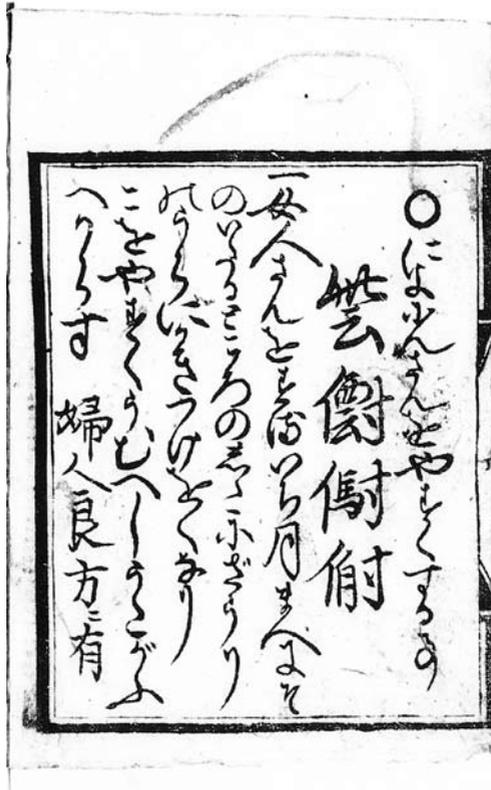
一わすれてもあしにつめをハいちと

にハとらぬものとぞゆいつたゑけり

(二行分空白)

(注)

爪には、切る日や時刻の禁忌が多いが、この三項は初見。二項目の呪歌の「ういミ」は「卯亥巳」か。「憂き身(巳)」を掛けるか。



○によんさん^(女人)をやすく^(易)する事

(呪符、四字あり)

一 女人^(産)さん^(二)をやすく^(前)するの

のいたるところ^(歴)のしたに^(下)ごうり^(草履)

のうら^(裏)にかきつけ^(付)をくなり

こ^(子)をやすく^(易)うむ^(産)へし^(疑)うたがふ

へからす 婦人良方二有

(注)

呪符の第一字は「此云」か。以下不明。安産の呪いは他にもいろいろある。参考として『太醫院校註婦人良方大全』(寛永十三年刊) 当館請求記号わ(20610) 卷十六第十四丁オの該当箇所を左に挙げる。

呪符

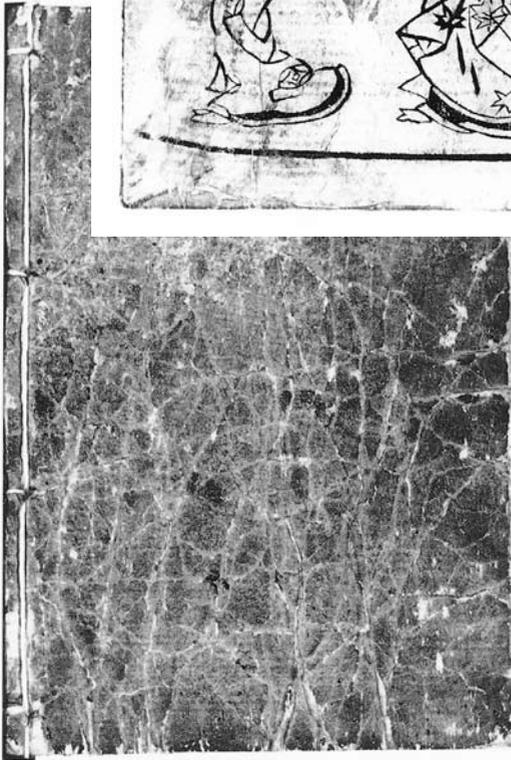
此、四符八月丁
日墨書鞋底上
家安産婦簿等
下勿令人知

(後ろ見返し)

(注) 扇を持って踊る二美人。絵は、この小冊に記されたことに従えば、息災で仕合
わせ良く、踊りを楽しむ暮らしができるとの意か。左の女性の扇と着衣にめで
たい七宝の模様。



(後ろ表紙)



二、『夜うちそか大名ぞろへ』一冊

(作者・刊年不明、八文字屋八左衛門板)

本書は、三重県松阪市射和町の旧射和寺地藏尊胎内に蔵された十冊の小本のうちの一冊『源よしつね高名ぞろへ』(次頁図参照)と類を同じくする作品かもしれないという点で見逃せない。

その十冊とは、昭和五十四年に岡本勝氏が重要性を確認、翌年春の日本近世文学会に報告されたもので、『初期上方子供絵本集』(角川書店 貴重古典籍叢刊13 一九八二年刊 当館請求記号KG341-10)に影印され、解説編に翻刻と作品解題等が付されている。

これらについて、岡本氏は『子ども絵本の誕生』(弘文堂 一九八八年刊 当館請求記号UM24-E4 六三〜六九頁)で、延宝六年(一六七八)正月から九月の間に十代半ばで亡くなった息子長九郎の菩提を弔うために、帯屋次郎吉が地藏胎内に納入したと推定されている。作品はそれ以前の刊行ということになる。

『源よしつね高名ぞろへ』と『夜うちそか大名ぞろへ』の共通点は、共に八文字屋板、ほぼ同じ大きさ、題簽の中央に界線を設けて題名を二行に書き、下端の線の下に板元を示す同形式の三点である。表紙は共に墨色で、前者には卍字つなぎ牡丹唐草空押しがあり、後者には剥離が多く確認

し難いが、唐草文様の痕跡らしき光沢と凹凸が認められる。

板元の表示は、前者は題簽に町名まで入れ、刊記はなく、後者は題簽には商標のみで刊記があるという相違がある。版面の様式も、前者は絵の上部五分の一強に文がある点が本書とは異なっている。このような相違点もあるので、同時期の成立と見るには無理があるかも知れない。

しかし、人物の描法に類似点を挙げることができる。武士にしては優しげな丸顔で、鼻は小さく、鼻先に接近する上唇は両端が少し下がっている。口髭は左右が離れ、ほとんど頬の中間に横に描かれる。足は指先が細く下方に向いている。同じ画工の作品かもしれず、さらに詳細な研究を要するであろう。

文は『曾我物語』(岩波書店 日本古典文学大系新装版 一九九二年刊 当館請求記号KG173-E4 底本は十行古活字本 以下「岩」と略す) 巻第八(屋形まはりの事) 三三〇頁七行目以下〜三三二頁に近似する。直接の先行資料については未調査だが、管見の範囲でも、幸若舞『夜討曾我』の紋づくし、また後世の紀海音作『曾我姿富士』の「牧狩屋形紋つくし」がほとんど同じで、有名な箇所であることがわかる。

絵は、十郎が数え上げる屋形から二十七屋形を選んで描き、順序は崩していない。部分的に、後人の施した手彩色

が少しあり、これもほとんど退色している。

〈書誌事項〉

請求記号 本別14-28 (マイクログラフフィルム YDI-173)

形態 一二・六×九・三センチ

表紙 墨色(元表紙とみられる。唐草の空押しは確認でき

ず)

題簽 表紙左肩に貼付 一〇・一×三・八センチ(子持杵)

「そがの十郎/大ミやうつめ」(中央に界線)

下端仕切線の下に丸(商標、但し墨で塗沫)

内題 夜うちそか/大名ぞろへ(第一丁、第一、二行)

丁付 一、(二)、三、十四

柱題 なし

画作者名 なし

刊記 八もんし屋/八左衛門板(十四丁末)

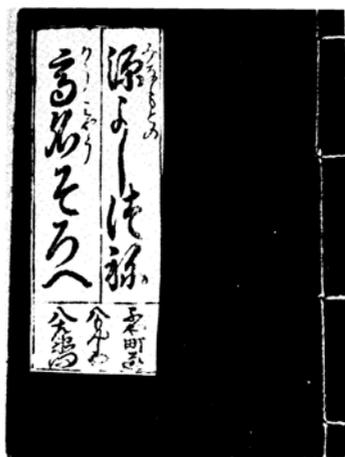
当資料の翻刻に当たっては、冒頭に記した方針の他、句読点に相当する「・」を「、」に置き換え、固有名詞の漢字の宛て方、鉤括弧は「岩」を参考にした。

絵は各半丁で独立しているので、半丁を区切りとした。

注は、「岩」との主な相違点を中心とした。

絵注は、着衣および烏帽子の名称、幕紋の詳細は正確を期し難いので参考程度に記し、構図にも着目してみた。

表紙



八丁オ



(参考)『源よしつね高名そろへ』

*前掲『初期上方子供絵本集』142頁・150頁より転載。

形態は12.6×9.1センチ(解題による)。

©角川学芸出版



(表紙)

(表紙)

(注) 〈書誌事項〉に「唐草の空押しは確認できず」と記したが、白く抜けてしまった円形は唐草の線かもしれない。
見返しは白紙のため影印を省略した。

一丁オ (下段)

夜うちそか

大名ぞろへ

五郎あにをまち

かねて、こゝろもと

なくしてた、す

みけるところへ、

十郎きたりて

いかにまちどを



一丁オ (上段)

十郎助成やかたの次第かたる

五郎時むね

(注)

待ち兼ねる五郎(左)の許に戻つて来た十郎。直垂袴に侍烏帽子の立ち姿で向き合う曾我十郎五郎の兄弟。五郎には蝶の、十郎には千鳥の模様が描かれている。「岩」巻第八(富士野の狩場への事)三一九頁に「十郎がその日の装束には、…、村千鳥の直垂に、(中略)五郎が其日の装束には、…、蝶を三つ二つ所々につけたる直垂に、(下略)」とある。この模様は後代まで著名で「蝶千鳥」で「曾我物」を表す。文は下段に対応。

一丁ウ（上段）

〔北条〕
ほうでうの四郎

〔注〕 北条氏の三鱗紋を付けた幕を掲げ、中啓を持って座す狩衣姿の北条四郎時政。烏帽子は金の折烏帽子か。文は四丁オに登場。



一丁ウ（下段）

なるか^{〔注1〕}、五郎き、^{〔開〕}

て、「さらぬだに人

をまつハかなし^{〔待〕}^{〔悪〕}

きに、をろかにお^{〔疎〕}^{〔思〕}

ほしめすものか^{〔思〕}

な^{〔注2〕}、「すけなりも^{〔祐成〕}

さぞんずるをかた^{〔存〕}^{〔敵〕}

きさゑもんがやか^{〔左衛門〕}^{〔屋形〕}

〔注1〕 「岩」は「なるらん」

〔注2〕 「岩」は「おろかにやおほしめす」



二丁オ (上段)

一条の二郎忠より

(注) 一条忠頼の紋は割菱とされるが、幕の紋は「窠」の一部に見える。狩衣に金の折鳥帽子後ろ鉢巻さか。背後の屏風に太刀が立
て掛けてある。文は四丁ウに出る。

二丁オ (下段)

たへよび入られ、
 さけをこそのみ
 つれ、「さていかにび
 むぎあしくさふら
 ひけるか」、「いふにや
 をよぶ、らんぶのを
 りふしやかたに
 五郎時むねこれ

(注1) 「岩」は「のみたりつれ」
 (注2) 「岩」は「いかに候ける。便宜あしく候ける
 か」
 (注3) 「しやかたに五郎時むねこれ」の部分は破損
 修理後の後人の加筆、「岩」は「折節」、あ
 われとおもひしかども、(御分…)、前行
 「のを」は正しい加筆。

二丁ウ (上段)

〔小笠原〕
おがさわら

〔注〕

松皮菱の紋を付けた幕を掲げて座す小笠原。鏡直垂に梨打烏帽子の後ろ鉢巻き姿で畳んだ扇を持つ。文は四丁ウに出る。



二丁ウ (下段)

御ぶ〔分〕ん一〔注〕ま〔注〕よ〔注〕けん

こそ〔存〕と〔兼〕ぞんしてこ

らへ〔志〕つるこゝろさ

し、〔推〕を〔量〕しはかり給

へ、〔聞〕五郎もきゝて、「御

ふち〔扶持〕ハさる事に

て〔候〕さふらへとも、こ

れ〔寄〕ほど〔付〕よりつか

〔注〕

「まよけん」は破損修理後の後人の加筆、「岩」は「一」所に



三丁オ (上段)

なんぶのさへもん

(南部左衛門)

(注) 南部氏の紋は舞鶴または雛菊とされるが、幕の紋は桐の葉の部分か。素襖長袴に侍烏帽子姿の座像で扇を開き持つ。背後に波を描いた屏風。文は四丁ウに出る。

三丁オ (下段)

ずして、心をつく(返)
 す、びんぎよくさ(便直) (良) (候)
 ふうらハ、御うちさ(詩) (候)
 ふうらふべきもの
 を、さりなから、一た(床)
 ちづ、ともく(共々)に
 きりたくさふら(候)
 ふぞかし、そのやか(屋形)

三丁ウ（上段）

下山

（注） 下山氏の紋は三階菱とされるが、ここでは黄紫紅（きんむらさきこう）のような五幅の幕か。単調を避けてか、斜め後ろ姿に描かれた座像は直垂に大口袴か。侍烏帽子を着け、弓を持つ。文は四丁ウに出る。



三丁ウ（下段）

たのやう、御らん（様）注（覧）

じさふらひける（候）

にや、「そのため、あ（案）

むないはよくみ（見）内（息）

をきさふらひぬ、（候）置（候）

たゞしやかたの（屋形）

かずおほくして（多）数（多）

見しりたる人ハ（知）知（知）

（注） 「やかたのやう」の箇所、「岩」は「其屋形の次第、道すがらの様」



四丁オ (下段)

(所々) しよくにこそさぶら
 (候) らひつれ、あふぎ
 (敷) ひらきてこそハか
 (先) そへけれ、「まつ君
 (原形) (並) の御やかたに、ならへ
 (打) てうちたりしハ、ほ
 (冬) うでうの四郎
 (時政) としまさ、御一

四丁オ (上段)

(梶原)
 かけはら源太

(注) 三豎矢筈の紋を付けた幕の内側で、素襖長袴に侍烏帽子で床几に掛ける姿か。背後に長柄の馬印と毛槍が掛けてある。当図も幕と人物の配置を変えて単調を避けている。江戸の文芸では、並び矢筈(矢羽根)は梶原氏の紋として名高い。文は四丁ウに出る。

四丁ウ（上段）

（和田義盛）
 わだのよしもり

（注） 和田氏の紋は三引両。絵では「下山」の場面と同様な五幅の幕か。狩衣に金の折烏帽子姿の座像で、傍らに太刀を横たえ、白髪交じりの風格ある人物に描かれる。文は五丁オに出る。



四丁ウ（下段）

（西）もん^{（參）}にハ、一^{（板）}でう、い

（垣）たがき、へん^{（逸見）}ミ、た^{（武）}

（田）けた、おがさ^{（小笠原）}ハラ、なん^{（南）}

（部）ぶ、しも^{（下山）}やま、山^{（名）}な、さ^{（里）}

（見）とミの人々、いし^{（石）}山、

（山）やま^{（注）}がた、かち^{（梶原）}ハラ、

（屋形）やかた^{（並）}をならべて、さ^{（候）}

（東）ふらふなり、ひがし

（注）「岩」は「やまかた」とあり漢字を宛てていない。



五丁オ (上段)

秩父重忠
ちぶのしげた

(注) 秩父重忠は畠山氏。紋所は三本傘または三花菱らしいが、幕は流水に桜散らしの総模様。義盛と同じく、狩衣に金の折烏帽子姿の座像。傍らに鎧を備え知将らしい風貌に描かれる。文は五丁オに出る。

ふらふらとわふさ
山くろど、あにさ
き、ほんだ、はんさは、
いけのへ、こたま、おさ
ハ、山ぐち、だんの、よ
こ山、さいのりやう
たう、おかべ、はんざい、
かねこ、むらやま、む

五丁オ (下段)

にハ、わだ、はたけ
山、くろど、あにさ
き、ほんだ、はんさは、
いけのへ、こたま、おさ
ハ、山ぐち、だんの、よ
こ山、さいのりやう
たう、おかべ、はんざい、
かねこ、むらやま、む

(注1) 「岩」は「丹」とあり「の」なし。
(注2) 「岩」は「紀清の両党」
(注3) 「岩」は「はんさう」とあり漢字は宛てていない。

五丁ウ (上段)

かねこの十郎

(注) 金子氏の紋は木瓜または「大」文字らしいが、幕の紋は渦巻きか。幕を掲げ、狩衣に梨打烏帽子向こう鉢巻き姿の座像。文は五丁オに出る。



五丁ウ (下段)

らをか、^(注1) なかさや^(注2) □^(注3)

かハシ、^(此金) ひき、^(中条) ちうでう、

ミタ、^(三田) むろの人々、^(注4)

やかたをならべてさふ^(雇形)

らふ、^(注5) ひたちの國に^(常陸)

ハ、^(佐竹) さたけ、^(内) 山のうち、

した、^(志本) とう、^(注6) ちかしま、

なめがた、^(行方) こくし、^(注7)

(注1) 「岩」は「むらおり」とし漢字は宛てていない。

(注2) 「岩」は漢字を宛てていない。

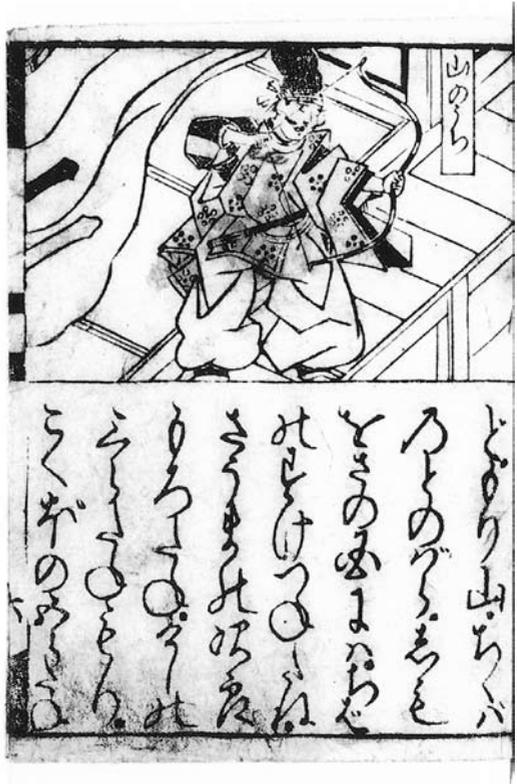
(注3) □は「さ」か。「岩」は「おかはら」とし漢字は宛てていない。

(注4) 「岩」は漢字を宛てていない。

(注5) 「岩」は「さふらふなり」

(注6) 「岩」は「同地」「鹿島」とする。

(注7) 「岩」は「こくは」とし漢字は宛てていない。



六丁オ (上段)

山のうち

(注)

山内氏の白黒一文字の紋を付けた幕を掲げ、右袖を脱いで弓を引く立ち姿。短めの上着は水干か。梨打烏帽子に後ろ鉢巻き。文は五丁ウに出る。

六丁オ (下段)

ど、もり山、ち、ハ
 のとのバラ、しも
 をさの國には、ちば
 のすけつねたね、
 さうまの次郎
 もろたね、けしの
 三郎たねもり、
 こくぼの五郎たね

(注1) 「岩」は「ち、わ」とし漢字は宛てていない。
 (注2) 「岩」は「二郎」
 (注3) 「岩」は「武石」



七丁オ (上段)

(相馬)
ク(つ)むま

(注) 相馬氏の紋繫馬を大きく描いた幕の上から内側を覗く構図。同構図の梶原氏から六図隔て、配置の工夫が伺える。鏡直垂に侍烏帽子姿の座像。幕内に武具が立て掛けてある。文は六丁オに出る。

七丁オ (下段)

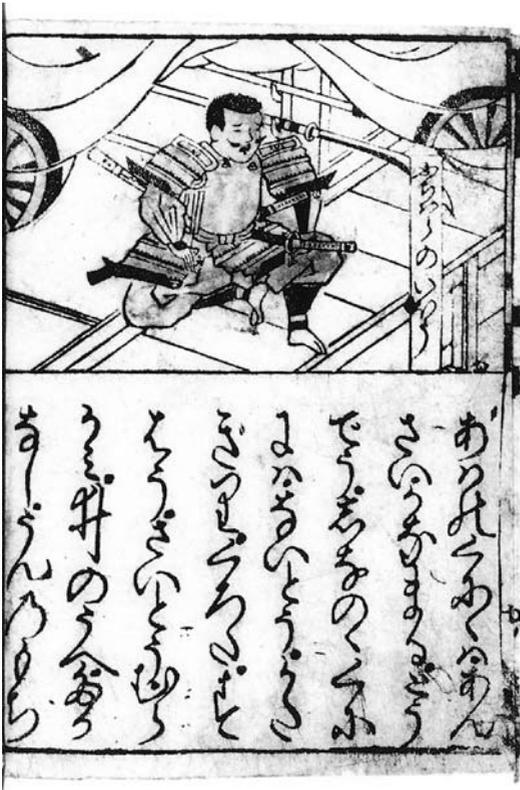
北(片南) ちやうなん、(印) ゐ
 東(金剛) かなをか、
 小寺(深瀬) 小寺、(山) やま
 こでら、ふかす、やま
 上(注) がみ、大こし、(室) 大むろ、
 上(総) かづさの國には、
 桐生(黒川) きりう、くろかハ、(多) た
 湖(片) むご、(新田) かた山、につた、
 園田(玉村) そのた、たまむら、

(注) 「岩」は「大こし」のまま漢字は宛てていない。

七丁ウ (上段)

藤原伊北
ふちハらのいほう

(注) 烏帽子を着けない鎧姿の座像は当図のみ。立てた左の足先が細く下に向く。幕の紋は藤原氏の源氏車。背後に長刀ほかの武具が掛けてある。本文は六丁ウに出る。



七丁ウ (下段)

あハのくに、ハ、あん(安房国)
 さい、かなまる、とう(神余)
 でう、しなの、くに(信濃国)
 にハ、ないとう、かた(内藤)
 ぎり、くろた、す(桐)
 はう、さいとう、むら(注)
 かミ、井のうへ、たか(上)
 なし、うんのもち(梨) (海野) (望)

(注) 「岩」は「くろた・すわう・さいたう」とし漢字は宛てていない。



八丁オ (上段)

〔新田〕
にたんの四郎

(注) 新田氏の紋は大申黒であるが、この幕の紋は七宝花輪違か。袖を括った狩衣に侍烏帽子姿の座像。背後に弓と壺胡縁が立てかけてある。本文は七丁オに出る。

八丁オ (下段)

月(注1)〔屋形〕(並) つき、やかたをなら
 べさ(候)ふらふなり、し
 野園)もつけのくに、ハ、
 (小山) 宇都宮)をやま、うつのみや、
 (結城)〔長沼) ゆうき、ながぬま、
 (氏家)〔塩谷) うちゑ、しほのや、
 (村)〔菅河) 木むら、みながハ、
 あしから、まの(注2)だの

(注1) 「岩」は「海野・望月」とする。
 (注2) 「岩」は「あしから・まのたの」とし漢字は宛てていない。

八丁ウ (上段)

〔海野望〕
うんのもち月

(注) 屏風を巡らして、長刀と太刀を立て掛け直垂に梨打烏帽子の向こう鉢巻き姿座像。幕は右下隅に少し描かれ、丸い縁の紋は不明。海野氏の紋・連銭の一部とは見えない。本文は七丁ウから八丁ウに出る。



八丁ウ (下段)

人くやかたをなら

べさふらひぬ、さがミ

のくに、ハ、さんま、ほん

ま、つちや、あいきやう、

といの次郎、ふし、か

すやのとう五、しふ

や、さとう、はたの、

うまのせう、をか

(注1) 「岩」は「土肥二郎父子」

(注2) 「岩」は「さとう」のまま漢字を宛てていない。

九丁オ (上段)

小山の判官



(注) 前図と趣を変えて、三頭左巴紋が明瞭な幕を直線に張って描き、しつらえも直線的な板戸か。長刀と鉾も垂直に立てる。狩衣に梨打烏帽子の後ろ鉾巻き姿の座像も端正。ただし、小山氏の紋は三頭右巴らしい。本文は八丁オに出る。

九丁オ (下段)

崎(三浦)、みうらの人

(伊豆国)

く、いづのくに、ハ、

入えわらしな、き(江)
(薬科)
(吉)

川(船越)

つかハ、ふなこし、大

森(寛)、かつら山、とを(遠)

もり、

たうミのくに、ハ、いし

江国

あま、しミづ、みか(注1)
(三川)

はのくに、ハ、したら、
(設楽)

はのくに、ハ、したら、

(注1) 「岩」は「いしあま」のまま漢字を宛てていない。「石浜」か。

(注2) 「岩」には「しとつ」とあり、漢字を宛てていない。「清水」か。

九丁ウ（上段）

（宇都）
うつの宮のや三郎

（注） 宇都宮氏の紋は二頭右巴らしいが、幕紋は判別し難い。狩衣に梨打烏帽子の向こう鉢巻き姿の座像で、立てかけた弓と三本の矢を見るような横顔に描く。本文は八丁オに出る。



九丁ウ（下段）

（中冬）
ちうてう、おハりの

（宮司）
くに、ハ、大ぐうじ

（関）
ミヤの四郎、せき

（美濃国）
の大郎、みの、くに

（高嶋）
にハ、たかしま、まつ

（近江国）
み、あふみのくに、ハ、

（相本）
山もと、かしハぎ、た

（錦織）
ついで、にしこり、さ、

（注1） 「岩」には「まつ井」とある。「松井」か。
（注2） 「岩」には「たつい」のまま、漢字を宛てて

いない。



十丁オ (上段)

(木) (寛)
き村たう

(注) 木村氏の紋は釘抜と松皮菱か、幕の左右にそれらしい紋が描かれる。鑑直垂に梨打烏帽子の向こう鉢巻き姿の座像。背景は水平に描かれ、鑑の下半が見える。本文は八丁オに出る。

十丁オ (下段)

(党) (屋形) (並)
木とうやかたをな
らべさふらふなり、
(俵) (也)
たうばんの人々
(当番)
にハ、ゆうきの七
(結城)
郎、河こへ、たかさ
(越) (高坂)
か、おうご、をしむろ
(天胡) (注1)
なむばの人つれ
(難波) (注2)
かつさのすけ人
(上総介) (注3)

(注1) 「岩」には「おしむろ」とあり、漢字は宛てていない。
(注2) 「人つれ」は破損修理後の後人の書き入れ。「岩」には「太郎」とある。
(注3) 「け人の」は同じく後人の書き入れ。「岩」には「上総介」父子」とある。



十二丁オ (上段)

〔本間〕
ほんまの入道

(注) 被り物は沙門頭巾か、僧形の座像。幕には胡蝶の紋が見えるが本間氏の紋ではないようである。文の八丁ウ「ほんま」が該当か。

十一丁オ (下段)

さて君の御ざ〔座〕
 ところをばまん〔真〕
 ありふはうはめん〔所〕
 まほりとのべ五〔角〕
 十九けんにかざら〔面〕
 めんくお〔面々〕
 もひくのやかたつ〔屋形〕
 くり、いろくのま〔幕〕

十一丁ウ（上段）

〔上座〕
つちやの三郎

〔注〕 狩衣に梨打烏帽子の後ろ鉢巻き姿座像。土屋氏の紋は薨か四目結らしいが白幕。鏡全図が描かれたのは当図のみ。文は八丁ウに出る。



くのもん、きんく
をちりばめてこ
そかざられけれ、
をよそやかたのか
ずハ、二まん五せん
三百八十よけん
なり、そうじて
じやうげのやかた
ぢやうげのやかた

十一丁ウ（下段）

〔金銀〕
くのもん、きんく

〔注〕
をちりばめてこ

〔飾〕
そかざられけれ、

〔屋形〕〔敷〕
をよそやかたのか

〔万〕〔千〕
ずハ、二まん五せん

〔余間〕
三百八十よけん

〔世〕〔総〕
なり、そうじて

〔上下〕〔屋形〕
じやうげのやかた

〔注〕 「岩」は「ちりばみて」



十二丁オ (下段)

のかず^(数)、十万八千
 げん、のきをなら^(間)
 べて^(並)こうじをやり、
 いらかをならべて^(兼)
 うちたりけり、^(打)
 ひがしにそふたる^(東)
 ハ、かちハラへいざ^(龍原平三)
 うかけとき、にし^(西)
 景時

十二丁オ (上段)

土肥
 とこの二郎

(注) 直垂に梨打烏帽子後ろ鉢巻きで中啓を持つ姿の座像。土肥氏の
 紋は三頭右巴か矢筈らしいが、幕には梅鉢らしい紋が見える。
 文は八丁ウに出る。

十二丁ウ（上段）

（官司）
大くうじ

（注）狩衣に侍烏帽子姿の座像。髯を蓄え風格ある老人に描かれる。背後に鎗と鉾が掛けてある。紋は不明。幕は五幅仕立てか。文は九丁ウに出る。



十二丁ウ（下段）

のはづれハさゑ（左衛門）

もん（門尉）のぜうすけ

つね（経）かやかたなり、い（幾）

くほと（程）、こそおもひ（思）

けん（聞）、五郎（客入）きゝて、「さ

てき（客入）やくじんハ、いづ

くのくに（國）のいかなる

人にて（候）さふらひけ



十三丁オ (上段)

佐々木

き、ぎの四郎

(注) 幕紋の四目結は佐々木氏の紋として名高い。狩衣も紋散らしで梨打烏帽子向こう鉢巻き姿の座像。弓と壺胡縁が立てかけてある。文は九丁ウから十丁オの箇所。

十三丁オ (下段)

備前国

る、「びせんのくに

住人

のちうんに、き

備津宮

びつみやのわう

藤内

とうない、手ごし

少将

のせうしやう、きせ

川

がハのかめづるをな

酒

らべをきて、さか

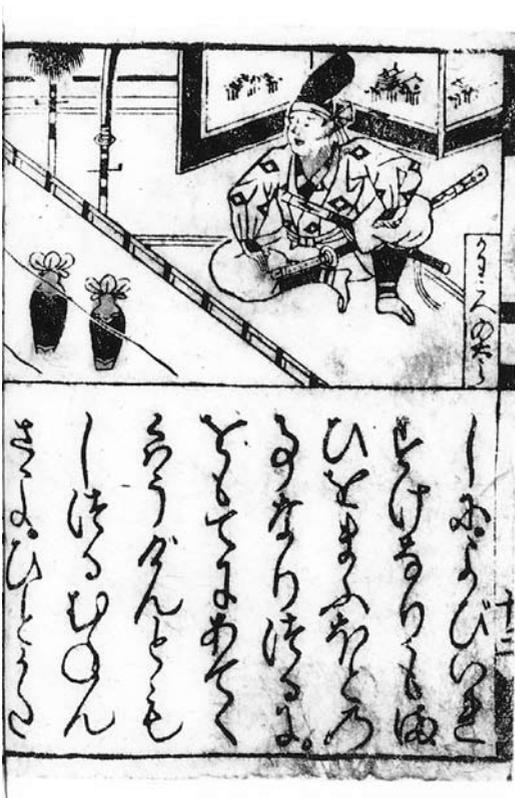
盛

もりなかななり

十三丁ウ (上段)

〔河越〕
かわこへの太郎

〔注〕 幕に河越氏の二瓶子紋。鎧直垂に梨打烏帽子後ろ鉢巻き姿。片膝立てた座像のため、足の描き方の特徴が良くわかる。背後に屏風、幕近くに長刀と馬印。幕を左下に張る構図は当図のみ。文は十丁オに出る。



十三丁ウ (下段)

しに、よびいれ

すけなりもま

ひをまふほどの

事なりつるに、

をもてにあて、

くハうげんとも

しつるむねん

さよ、ひとかた



十四丁オ (上段)

〔上巻〕
かつさの助

(注) 紋は月星または八葉らしいが、この幕は五幅幕か。狩衣姿に折烏帽子か後ろ鉢巻きの座像。中啓を持つ。文は十丁オに出る。

十四丁オ (下段)

な(刑)さし、い(注1)かにも(思)もと

も(注2)ひ(敵)けれ(置)とも、わ(敵)との

い(命)の(命)ち(置)がお(置)しまれ

て、手(握)に(握)に(握)ぎり(握)た

るか(敵)た(逃)きを、の(注3)が(注3)し(注3)つる

む(無念)ね(無念)ん(無念)な(無念)れ、五(圓)郎(圓)き、

て、「(是)これ(宝)や(宝)た(宝)から

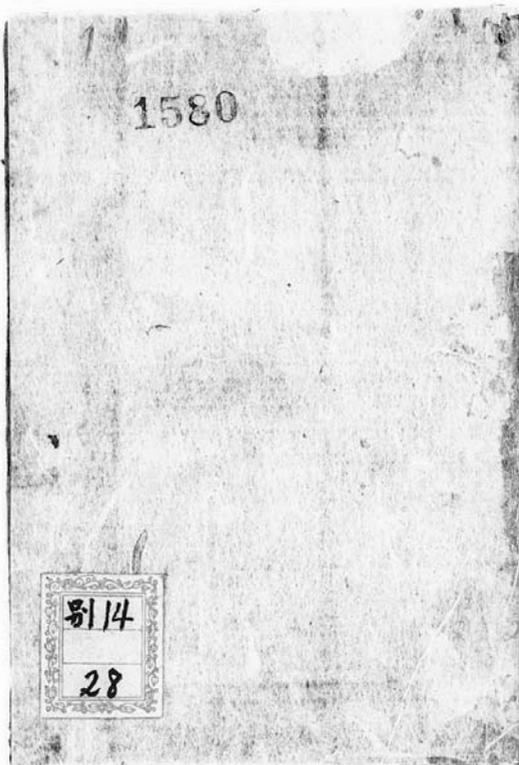
の山(宝)に入(宝)て、手(宝)を

(注1) 「もも」の上の「も」は、後人の書き入れか。

(注2) 「岩」には「おもひつるを」

(注3) 「岩」には「のがしつるこそ」

(後ろ見返し)



(きむら やえこ 元金城学院大学教授)

(後ろ表紙)